

主 題：裏切られた救い主

聖書箇所：マルコの福音書 14 章 12 - 21 節

神はすべての人が救い主を信じることを望んでおられます。しかし昔も今も、人々はなかなか心を開きません。イエスが神から遣わされた救い主であることを信じようとはしないのです。

いよいよイエスが十字架にかかれる時が近づいてきました。

過越の祭りについて「出エジプト」に記事があります。12 章 1 節から、「この月をあなたがたの月の始まりとし、…」、新しい暦です。これははじめアリーブの月と言われていたのですが、バビロンの捕囚後、ニサンの月と呼ばれるようになりました。バビロン暦第一の月で今の 3～4 月に当たります。続いて、3 節から見ると過越の食事について、ニサンの月の 10 日目にいけにえを備えること、14 日目に羊をほふることとその夜にそれを食することが書かれています。この祭りはイエスの時代もそして今もイスラエル人は守り続けています。マルコ 14：12 には「種なしパンの祝いの第一日、すなわち、過越の小羊をほふる日に、」とあります。この食事を見てみましょう。

いけにえの羊＝人々はいけにえの羊をもって神殿に集まります。犠牲担当の祭司に羊を渡され、それは夕暮れにほふられるのです。午後 3～5 時頃です。(これはイエスが十字架上で息を引取られた時刻です。) 内臓と頭・足は火で焼き、肉は持ち帰って焼いて食べるのです。

種なしパン＝イーストを除いたものです。エジプトから出てゆくのにイーストを入れて発酵させている時間はありません。また、イーストは悪い影響のシンボル(罪)をあらわします。

一鉢の塩水＝エジプトで奴隷であった時に流した涙を、また、紅海をあらわします。

苦菜＝ししや菜など苦い菜っ葉です。自分たちの祖先の奴隷としての苦しみです。

ソース＝りんごやなつめなどを搗って酢と混ぜ合わせたものです。これはエジプトでの苦役、レンガを思い起こし、そこに加えるシナモンはレンガに混ぜるわらを覚えるのです。

ぶどう酒の入った四つの杯＝これは神の四つの約束を覚えます。出エジプト 6：6,7 にあります。(1)エジプトの苦役から救い出す。(2)労役から救い出す。(3)あなたがたを贖う。(4)わたしはあなたがたの神となる。

14：13-16 には、食事をするための場所について、イエスは弟子たちに「心配しなくてもいい、備えてあるから」と言われます。それは、イエスは弟子たちの弱さを知っておられるからこのように言われたのです。水がめを運んでいる男と言われましたが、当時、水を運ぶのは女性の仕事でしたから、それを男がしているなら、誰にでもすぐにそれとわかります。神は単純なわざをもって私たちを導いてくださるのです。神はすべてのことを備えてくださいます。ご自分の計画を隠すことはなさらないのです。

17 節から、食事のために皆は集まってくるのです。この 17 節と 18 節の間にイエスが弟子たちの足を洗ったことがあります。ヨハネ 13：1-20 にあるとおりです。並行記事がマタイ 26：20～にあります。26：21, 22「皆が食事をしているとき、イエスは言われた。『まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちひとりが、わたしを裏切ります。』すると、弟子たちは非常に悲しんで、『主よ。まさか私のことではないでしょう。』とかわるがわるイエスに言った。弟子たちは「あなたではない」といつてくれることを期待していたのでしょうか。弟子たちは一人一人自分の弱さを知っていたから、もしかしたら私かもしれないと悲しんだのです。だから、だれひとり他の人を指して、「あの人だ…」とは言わなかったのです。そして、25 節を見ると、ユダはイエスのことを「主」ではなく「先生」と呼んでいます。

マルコ 14：18「わたしといっしょに食事をしているものが、」、20 節「わたしといっしょに、同じ鉢にパンを浸している者です」、ユダはイエスのそばにいたことがわかります。マタイ 26：25 には「いや、そうだ」とイエスはいわれたとありますが、それは皆には聞こえません。イエスは皆に裏切り者はユダだと言わなかったのです。この席でそれを言うと他の弟子たちはきっとユダをそのままにはしておかなかったでしょう。イエスの十字架は神のみこころですから、それが妨げられないためにユダをそのままにされたのです。マルコ 14：21 でイエスは、ご自身が主権者であると言われていました。「自分について書いてあるとおりに、去って行きます」、ヨハネ 13：18 に「わたしのパンを食べている者が、わたしに向かってかかとを上げた。」と詩篇 41：9 のみことばが引用されています。「私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、」と、イエスはユダを親しい友とされたのです。間違った選択をしたユダ、しかし、すべては神の計画です。また、ご自分がさばき主であるといわれています。ユダの選択に対するさばき

の大きさ、それは生まれなかった方が良かったほどの苦しみだと言われるのです。

ユダの間違ひは、イエスの愛を拒みつづけたことです。イエスとの交わりの中に入れられていたのに、そして、イエスから足をあらってもらっているのに…。この最後の晩餐の席では、ユダはイエスの左隣に座っていました。ヨハネ 13:21 から見てみましょう。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたのうちのひとりが、わたしを裏切ります。弟子たちは、だれのことを言われたのか、わからずに当惑して、互いに顔を見合わせていた。弟子のひとりで、イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。そこで、シモン・ペテロが彼に合図をして言った。『だれのことを言っておられるのか、知らせなさい。』 その弟子は、イエスの右側で席に着いたまま、イエスに言った。『主よ。それはだれですか。』 イエスは答えられた。『それはわたしがパン切れを浸して与える者です。』それからイエスは、パン切れを浸し、取って、イスカリオテ・シモンの子ユダにお与えになった。彼がパン切れを受けると、そのとき、サタンが彼にはいった。そこで、イエスは彼に言われた。『あなたがしようとしていることを、今すぐしなさい。』 席に着いている者で、イエスが何のためにユダにそう言われたのか知っている者は、だれもなかった。」 ユダは名誉ある席に着いており、イエスが最初にパン切れを与えたのはユダでした。「わたしの友よ…」とイエスに言われたユダでしたが…。イエスは誤った選択をしたユダにチャンスを与えたのです。悔い改めるようにと神は機会を与えておられます。しかし、ユダはサタンに用いられてしまいます。サタンの目的のために…。ユダのその後をみて、私たちは永遠ののろいがあることを知るべきです。

神はこの 14 日にイエスを殺すことを計画されていました。律法学者、パリサイ人たちは祭りの終でとしていたのに…。そのためにユダを使われたのです。すべて神のご計画です。ヨハネはイエスのことを「世の罪を取り除く神の小羊」と言いました（ヨハネ 1:29）。いけにえがほふられる時刻、午後 3 時は、イエスが十字架上で息を引き取られたときでした。まさに、イエスはいけにえの小羊となられたのです。それは、私たちの罪の贖いのためでした。